
つきびと商人

くるる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つきびと商人

【Nコード】

N9131Z

【作者名】

くるる

【あらすじ】

商人が都市運営をする自治区「フロント市」その落ちこぼれ技工士見習いレイルはある日、簡単な依頼だから、と安易にそれを受けて薬草の採取のために深夜の密林に出向いた。しかしそこには近頃、巷で噂になっていた超危険モンスター「あやかし」がいて……

あらすじは随時更新していきます。本編もできる限り毎日更新したいです。どうぞよろしく願います。お気に入り、感想、評価点などくださるととてもうれしいです！

噂のあやかし（前書き）

どうぞよろしくおねがいします

噂のあやかし

「どうなってんだよ！」

闇深く、夜の帳のおりきった密林を一人の少年がかけていた。肩を大きく揺らし、白い息を吐き出しながら疾駆する。その顔は恐怖に歪み、言葉にならない悲痛の叫びをその面持からまき散らしている。

「なんでこんなところに、こんな奴がいるんだよ、聞いてねえよ！」

彼の後ろ、そこには彼をここまで追い詰めている「何か」があった。いうなれば人間大の黒い靄。そこに明確な輪郭はなく、ただ虚ろな黒だけが、なぜか夜の黒の上でいつそうの存在感を示す。溶けて混ざることのない異質の黒。それがあった。そしてこの少年、どうやらこの靄から逃げているようである。

「つつ……きつついなあ、おい！」

少年は密林を縦横無尽に駆け巡る。しかし、それは自由を示す言葉ではない。自由を縛られているが故の縦横無尽だ。密林、そこには数多の植物が自由にその弦、幹、枝を張り巡らしていて、少年の行く手を遮っていた。それを避けるために少年は跳躍、方向転換を強いられ、3次元的な逃走を余儀なくされている。しかし……

「相変わらずチート臭いな、「あやかし」さんよ！ああっ！もう、死ぬんじゃないかな、俺」

「あやかし」そう呼ばれた黒い靄は直線的に少年へと向かっていた。それはその通り道に横たわっていた巨大な倒木、枝から垂れ下がる

蜘蛛の巣のような弦、そのすべてを飲み込んで迫っていた。その黒い片鱗に触れるたびにそこにあったものは「なかったもの」に変換される。幹を失った大木が大きな音を立てて倒れていく。これが少年の体に触れた時何が起きるか、それは想像に難くない。

「あの嘘依頼の野郎……帰ったら叩きのめす」

生存を前提に軽口をたたく少年。しかしこの状況、完全に少年の劣勢だ。少年と違い、「あやかし」は直線的に移動できる。移動速度が少年のほうが早いとしても、走るべき距離が違いすぎる。事実、二者の距離はじりじりと迫っていた。

「こいつなんで俺狙ってんだ？そんなに腹が減ってるのかよ」

「あやかし」は答えない。当然だ。「あやかし」は人間たちが言うところの「怪物」であり、人語を介することはない。ここ最近巷で噂になっていたモンスターで、「あらゆるものを飲み込んでしまう化け物だ、出会ったらすぐ逃げろ」と軍の長官が発令するほどのモンスター。それがなぜか少年を追っていた。「あやかし」は冷酷に少年へとせまる。少年は目の前の幹、人が二人手を広げたほどはあるだろうか、それを避けるために大きく上へ飛ぶ。その枝はその幹の大きさに準じて太く、少年の体を支える。

「くっそ、こっちには疲労ってもんがあるんだぞ！考えてくれよ！」

少年の支離滅裂な一言は密林に吸い込まれて消えていく。もちろん誰かに助けを願うことはかなわない。深夜の密林、そんな危険なエリアに誰が立ち入るといえるだろう。そして彼の限界はその軽口とは対照的にすぐそばまで迫っていた。少年は町の「依頼」を受けてこの密林に葉草の最初にやってきた……はずだった。簡単な「依頼」

のはずであった。しかしその採取ポイントとして設定されていた場所にはこの黒い靄、「あやかし」がいたのだ。少年は早々と依頼を終えようとして夜の密林に踏み込んだのだ。

「俺の甘い考えのせいか、つと……」

少年はできるだけ遠くを目指して跳躍する。距離をとる、逃げ切る。その一心で飛んでいく。

飛躍のさなか、めきめき……背後でそんな少年をあざ笑うかのように大木の倒れる音が響く。

「ちつくしょう……」

その予想外に近い音源に少年は歯噛みし、その表情をさらにゆがませる。

「つつう……」

着地、そして突如として足首にはしる激痛。あまりの酷使に少年の体が悲鳴を上げ始めたのだ。それでも少年は逃走、生存の意思を貫く。走る、跳躍、落下、リスタート、跳躍、跳躍……密林の入り組んだ構造に歯噛みをしながらも、少年は生きるためにかける。

「あアっ！」

しかし体の崩壊は止まらない。踏込、着地、それと同時に密林を悲鳴が貫く。少年の足はもはや限界だった。密林中央で異変に遭遇、実に30分の全力での逃避行。肺は酸素を求めて躍動し、足は空回りながらも生存のためにその惰性を貫き通す。全身が生存を求め、

酸素を求める。心臓も「生きる」その一心のために打ち付け、体全体に燃料を送り続ける。

「一度で、も……こけたら……アウ、ト……」

もはや足は自らの意志では動かない。惰性だけ。それを、力を、少しでも失ってしまったら最後、再度動きだすことは絶望的だ。いまやかれの足は足ではなく、動力を持たない車輪と化している。

「なんで……」

跳躍のための「力の貯め」が辛い。走り抜けるための「踏込」が辛い。それでも体は生きようとする。そんな少年の姿とは裏腹に、「あやかし」はゆっくりとしかし確実にその距離を詰めていた。

「はあ、はあ、はああっ！」

方向転換のために「立ち止まる」のが辛い。弦を「よける」のが辛い。ああ、「生きる」のもなんだかつらい。少年の心にそんな魔が差した。

「えっ……」

その隙間が命取り。少年は密林の弦に足を取られ、頭から地面に突っ込んでいった。すさまじい音を立てて少年は倒れふす。必死に腰を上げようとする彼ではあったが、足は彼のものではないようにまったく動こうとしない。

「くっそ……なんでだよ……」

身体に動きが止まったことによって心臓の脈動はさらに加速する。
末端の血管が破けているのではないかというほどに熱い。

「なんでこんなところで……死にたくない……」

熱い。それだけが彼に生の実感を与える。しかし、その熱さすらも
少年からはく奪されていく。

「ッ……」

おぞましいほどの寒気。背中伝わる其れに彼は戦慄する。

「何なんだよ……」

その背には黒い靄がひっそりと絡みついていた。はた目から見ると
それは優しい抱擁にすら見えるが、彼の表情はみるみる青ざめ
ていく。瞳は見開かれ、唇はわなわなと小刻みに揺れる。

「なんで……」

何度目になるだろうか。答える当てのないはずの質問。「あやかし」
は言語をしゃべらない。周りにはもちろん人間はいない。うっそう
と茂る密林だけが少年を見つめる。

「やっと……見つけた……」

しかしそれにこたえる声があった。こたえたのは幼い少女の声だっ
た。少年はわずかに顔を動かしてあたりをうかがうが声の主はとら
えられず、そしてその声が彼がきいた最後の声になった。

噂のあやかし（後書き）

一話だけでは解決しないことが多々あります。二話をお待ちください。よろしく願います。

レイルの早朝

「だああああ！遅刻する、やばいって！いくらなんでも今日はやばいって〜！」

早朝の住宅街。その一角にある酒場の二階の質素な一室。そこから少年の絶叫が響き渡る。それは早朝の鶏の嘶き程に大きく、一日の始まりをあたりの住民に伝えて、すがすがしい気分で迎えることができる……

「うるせえぞ、坊主！」

わけもなく。歓迎はもちろんされていなかった。階下から男性の野太い声がまたまた早朝の住宅街にこだまする。声の主はどうやら酒場の主人のようだ。筋骨隆々と言った風な肉体を持つ、スキンヘッドの店主は厨房で大きなビールグラスを洗いながら目線をグラスからそらさずに怒鳴っていた。その体格に似合わない小さなエプロンが印象的だ。

「すいませんっ！」

少年の相変わらず大きな声が響く。

「マスター！飯、大至急！」

どたどた……アパートの薄い床に足音が鳴り響き、階下の酒場を揺らす。しばらくすると扉が勢いよく開いた。そこから現れたのは今朝の大声の持ち主の少年、長めの黒髪で片目が隠れてしまいそうだが、しかしほかの特徴といった特徴はなく、強いて言えば形の整った黒

の瞳が印象的ではあったが、ほかは特に取り立てることもない、一般的な容姿をしている。身長もあまり高くない。裾が長めにとられた黒のコートを羽織、扉から飛び出す。薄い床はその勢いに圧倒され、なおさらに大きく軋み、音を立てる。

「うるせえ、何様だレイル」

「お客様だよ！頼むからパンでもなんでもいいから用意してくれ」

階段を駆け下りるレイルと呼ばれた少年。それを呆れたように見ながら、店主はため息をついた。

「こっちは家賃までおまけしてやってるのによ……なんだ、その態度は？」

「うるせえぞ、マスター、そんな生活にも今日でおさらばだから言ってるんだよ」

レイルは階段を降り切って酒場のマスターの前、カウンターにどんと腰かける。

「なんだと？」

「今日で俺、レイルは「商人」として認められて自身の工房を手に入れるのだよ。こんなみすばらしいアパートからも……」

レイルはそういつて胸をそらす。その偉そうな態度のレイルの顔面に向かって突如として包丁が飛んできた。

「ひっ！」

それをレイルはぎりぎりでかわす。飛んで行った包丁は鈍い音を立てて後ろの床に突き刺さった。

「っち……いい加減にあたれってんだ」

「おっかねえ、人殺し！ろくでなし！」

「最期はお前にうってつけだな」

そういつてマスターは洗淨作業に戻ってしまう。その様子を見てレイルはなにやらそわそわし始める。

「え、ちょ……マスター……ご飯くれないの……？ねえ」

マスターは振り向かない。

「え、急いでるんだけど……」

急に意気消沈している彼の懇願にもマスターは振り向かない。すごい勢いで皿がきれいに洗淨されていく。マスターの背中からはただただ「拒絶」の二文字が浮かび上がってくる

「ほら、俺今日「昇進試験」だしさ。くれよ、頼むよ、いや、お願いします、恵んでください」

「最初からそういや。馬鹿野郎が」

気が付くとレイルは土下座していた。額を決してきれいとは言えない酒場の床にこすり付け、懇願している。それをみたマスターはなおさらにあきれ返ると、なにやらかわいらしい袋にくるまれたサンドイッチをカウンターに置いた。

「今日は商人目指しての昇進試験なんだろ？ったく、こんな日まで寝坊してきやがって、気をつけろよ。「ためしの洞窟」とはいつても出てくるモンスターは本物だ。死ぬかもしれないしな……」

「マスター……」

マスターは真剣なまなざしでレイルを見つめる。レイルはまだに床から腰を上げず、顔だけをマスターに向けている。その顔はほころび、まるで親を見つけた迷子のようにですらあった。しかし、

「けどやっぱりそのエプロンはキモいと思う。んじゃ」

すぐに真顔になってそう思ったと思うと彼はすぐさま立ち上がり、サンドイッチをマスター製のサンドイッチを奪取し、店外へ向かって一目散にかけていった。その勢いはすさまじく、それを目の当たりにしたマスターもしばらくの間、呆けていた。その容姿を真正面から侮蔑されたマスター、怒り心頭してもおかしくはないだろう。しかし予想に反してその様子はおとなしかった。

「あいつ……部屋の鍵を俺が返られること知らないのか……？」

そういつてマスターは階段を上がり、レイルの部屋を目指すのだった。

通勤の混雑

「前見てあるけってんだ坊主！」

クローネ通り。商人の町「フロント」の中央を貫くこの大きな通りをレイルはひた走る。茶色の煉瓦でつくられた畳がきれいに敷かれたこの通りは朝、数多の商人、町人でいっぱいになる。人と人の間にはわずかな隙間しかない。レイルは器用にステップを踏んで進んでいた。その様子を快く思わない人もどうやらいたようで、時折怒声が上がった。

「つたくいつ来ても馬鹿みたいに混んでるね、ここは」

レイルは休憩のためにその足どりを緩める。手にはサンドイッチ。ピンク色の小さな巾着にくるまれたそれをみてレイルは小さく顔をしかめる。

「マスターの趣味がわからないよ……けど、ありがたくいただきます」

この少年、口は悪いが最低限の礼節はわきまえているようだ。

ゆっくりと人込みに流されて彼は進む。周りには難いの良い兵士風の男、でっぷりと太った商人、申し訳程度のお化粧をしたご婦人など、さまざまな人が歩いている。空は青く、人の流れとは対照的に雲が勢いよく流れていく。

巾着のヒモを解きサンドイッチを取り出す。移動しながら食べることを見越してか、一口大に切りそろえられたそれからはマスターの思いやりが感じられる。具は鶏のゆで卵とマヨネーズを会えたものにきゅうりを挟んだもので、レイルの大好物だった。

「マスター本当にいい人だな……それでもあのエプロンはないけどさ。ああ、うまい……」

ひよいと口に運びかみしめては悦に入る。唇の端にはマヨネーズの白が残っている。紅い唇によく映えるそれは何とも情けない。しばらく歩き続けただろう。サンドイッチもあと一切れになってしまった。

「喰うか……なんかもつたいないな……」

それをいつ食べようかと悩んでいたレイルにふと声かけられた。少し調子の高い、男の声であった。

「少年、その布はもしかや「エプロン亭」の店主のものかな？」

レイルが振り向いた先にはでっぷりと太った男がいた。上ものであろう、希少なモンスター、「ケブラ」の毛皮で作られたコートを羽織り、ひげをたつぷりと蓄えた彼はいかにも「商人」といったいであらう。帽子にマフラー、防寒装備は完璧だった。

「ん、そうだけど。おっさん何者？商人さん？」

軽く、まるで同級の友達にいうかのごとく問うレイルの姿に男は少し眉を吊り上げたがそれ以上そのような仕草を見せることもなくうなずいた。

「そうだよ、トレイン商会に所属して商いをさせてもらっているんだ。取扱いのメインは見ての通りケブラ製品なんだ」

「ふーん、それでその商人さんが俺に何の用？」

彼のこの態度はとても商人を目指している人のものではないだろう。つっけんどんな彼の態度にも男はひるまない。

「店主から預かりものをしていてね。差し入れだそうだよ。食い足りないだろうって」

そういつて男は袖口から一つの中着を取り出す。それはレイルが持っている巾着とまったく同じものであった。ヒモ、布の色すべてがピンク色のかわいらしいものであった。

「なかにはサンドイッチのお代わりが入ってるそうだよ。君は好かれてるんだね」

「マジかッ！今日のマスターはなんだか神様みたいがいいひとだな」

そういつてレイルは男から巾着を受け取る。中をのぞくとそこには先ほどのものと同様の一口大のサンドイッチが並んでいた。レイルは顔をほころばせる。

「ありがとさん。けどあんたみたいに恰幅のいい商人さんをパシリに使えるなんてあのおっさん何者なんだ？」

「彼にはむかしお世話になっていてね。ふるい仲なのだよ。おっとそろそろ私の勤務先だ。それではな、少年。昇進試験、頑張りたまえよ」

「ああ、ありがとう」

そういつて男性は「トレイン商会」と大きく掲げられた石造りの建物に入ってしまった。

「今日はついでる気がするな。今朝の夢が嘘みたいだ。死ぬとか不

穏すぎてあせったぜ」

彼はもらった巾着を腰から下げる。さすがに今食べたばかりだ。昇進試験は長丁場になる。その間に食べるおやつにしよう。彼はそう思い、涎をこらえてコートの裾をかぶせる。

「よっしゃ、「昇進試験」、気合い入れていきますか！」

ずっと先まで続く石畳、その突き当りを目指してからは再び喧騒の隙間を抜けていく。目指すは「ためしの洞窟」。自然に生まれた都市外苑の洞窟。野生のモンスターも暮らしているそこが今回のレイルの昇進試験の会場であった。

通勤の混雑（後書き）

案外重要な回だったり…… 次回「昇進試験」、レイルが目指そう
としている「商人」とはなんぞや、についての説明などがあります。
お待ちください。

形と意味

「ためしの洞窟」

都市外苑に存在する異質な洞窟だ。この自然に生まれた洞穴はいまだに開発の手は入れられず、さまざまな素材を採取するのに最適な洞窟としてフロント市がみずから運営している。内部には多数モンスターも巢食っているが、その一部を武器や防具の素材として扱うことができるためにある程度数の調整はしているもののほぼ野放しと言った風だ。多くの「技工士」がその素材を求めて足を運ぶ。

「技工士」とは武器や防具を手掛ける商人のことだ。個人からの依頼を受け付けて、モンスターの一部や、特殊な鉱石などを用いて一つの作品を作り上げることが彼らの仕事である。その武器、防具は受注者の要望に答えたオーダーメイドである。使用者の体格、使用する得物、戦術などのリクエストをくみ取り、最適のものを作り上げる。そのために最適な素材を得るため、自ら出向き、手に入れることが一般的だ。なぜなら各「技工士」によって必要としているもの、すなわち受ける要望が大きく異なるために、素材の状態、品質も大きく異なっているのだ。大手の商會が大規模な技工士むけの商売をしてもそのニーズにこたえられず、利を生むことができないからだ。商會に依頼して手に入れることも可能ではあるが、その際に生まれる莫大な手数料を考えると、ほとんどの技工士が手を出せないのが現実だ。

「おそいぞ、レイル」

その入り口は都市の小道の先にある。住宅街の壁の間にひっそりと口を開けているそこに一人の青年が立っていた。短いつやのある黒髪、藍色の眼が妖しく光る。身にまとうコートも藍色でまとめられ

ていて、その繊維はどうやら先ほどの男のものと同じく「ケブラ」のものであった。

「キリト、待たせたな」

少年の名はキリトというようだ。レイルは小走りで彼の元までやってくる。彼の目前には冷たい空気を外界へ吐き出す洞窟の顎門があった。

「本当だよ。こっちは30分前にここに来ていたっていうのにな。もし途中でトラブルがあったらどうするつもりだったんだい？」

「わりいわりい。いやな夢を見ちまってさ。試験会場はここでもいいのか？」

レイルは洞窟の入り口を見上げる。大きな穴だ。人が縦に何人肩車をすればいいであろう。その奥からはつめたく湿った空気の流れが生まれている。先は底抜けに暗く、数寸先もうかがい知ることとはできない。

「ああ、この先、洞窟の中腹に試験挑戦のための受付がある。まずはそこを目指して進もう。ランタンはあるかい？」

キリトはそういつてコートの中から一つのランタンを取り出す。ガラス製の球体にかたどられたそれはいわゆるランタンといった形からは大きくかけ離れていた。

「大丈夫、ポーチに入れて持ってきた」

レイルはそういつて腰にまいたポーチを開き、小さなランタンを取り出す。キリトのものよりは一回り小さいが形は同じく球体のラン

タンであつた。

「よし、じゃあ行こうか。僕らの技工士への昇格を目指して」

「俺たちの工房を求めて」

二人はそういつてうなずき合つて洞窟の中に消えていった。

ゆるく風が流れていく。洞窟の奥から響く唸りのようにも聞こえるそれは、二人の体に絡みついていく。薄暗い、とは違う。完全な暗闇、踏み出す先も見えないような洞窟内でランタンの放つ暖かな光だけが、二人の先を照らす。それがなくなつてしまえば、そこは黒の世界。何も見えず、地面の存在すら認知できないだろう。上下左右のない世界が広がるだけである。

「それにしても、このランタンすごいよな。技工士がつくつたものはやっぱり便利だな」

「それはそうだろうさ。このランタンだって綿密に計算されてできているんだから」

その中のともしび。二つの光の筋がさす。二人が持つランタンからは火の輝き以外の光源があるかのように光があふれだす。そのランタンは二人のお手製のものであつた。

「「丸いランタン」にすると「明るさ」っていうか「純度」が上がる……って便利だけでもいったい誰が決めたんだろうな？」

レイルはランタンを少し動かして下からのぞいてみたり、横から眺め

てみたりしている。彼らの歩いている道は決して快適なものではないにもかかわらず、彼はまったく軸をぶらすことなく進んでいく。

「知らないよ。けどそういうことになっている。神様あたりが勝手に決めたんじゃないの？」

キリトは興味がないよ、といった風に手を返す。

「まあそうなんだけど技工士の仕事にも関わってくるだろ？」

「形はそこに意味を宿す」技工士の間で用いられる格言の一つだ。あるものに「意図」して形を与えた場合、そこには何らかの「意味」すなわち付加価値が生まれる、そんな意味だ。このランタンもそのうちのひとつである。技工士の間で「球」はより完全な形、最も安定した形、すなわち純度の高い形態として認識されている。その形を「意図」してランタンに組み込むことによって光の純度を上げているのだ。一種のまじないのようなものであるが、実際にそれが物理現象として発生している。

「結果だけあればいいだろう。ランタンを丸くすれば「純度」が上がる。刃物を磨けば「切れ味」が上がる。そこに理由なんて必要ないさ」

なぜそのような現象が生まれているかはまったくもって解明されていない。神のいたずらなどと言われたりしているが現在は「そういうものだ」とする人間が多いのが事実だ。

「ま、俺みたいな落ちこぼれが考えても仕方がないことか」「そうだよ。今は始まる試験のことだけを考えよ」

二人の先に別の明かりが浮かび上がる。丸いともしび、ランタンの光のようだ。

「お、あそこかな。けどあの明るさだとまだずいぶんとありそうだ」
「ああ、少し急ごうか」

二人は会話を中断し、すこしだけ足取りを速めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9131z/>

つきびと商人

2012年1月1日23時35分発行